

V05b 仮想天文台を目指した電波・近赤外線パイプライン・プロトタイプの開発

立松健一、森田耕一郎、澤田剛士（国立天文台）、神鳥亮（総研大）、中西康一郎、砂田和良（国立天文台）、石原康秀、阿部勝己、堤純平（富士通）

国立天文台電波（ALMA-J および野辺山）の有志によって行っている、仮想天文台インターフェースのプロトタイプ開発について報告する。近年、仮想天文台が天文学における世界的な潮流となりつつある。仮想天文台にとってはALMAデータが重要なターゲットであり、ALMA地域サポート・センター（RSC）にとっても仮想天文台が重要なアクティビティのひとつとなる。仮想天文台では一次解析済み（較正済み）のサーベイデータが、現在主なターゲットであるが、科学者の興味の多様性、セレンディピティ、などから、将来、仮想天文台で生データを扱うことへの要求が高くなると予想する。

このような観点で、われわれは仮想天文台への応用を考えた、生データ・パイプライン処理インターフェースのプロトタイプを構築中である。仮想天文台のデ・ファクト・スタンダードであるGlobusを用い、データとしては野辺山電波データ（NRODB）および近赤外3色撮像データを扱う。処理部分は、現在はRSI社IDLで記述している。将来は、仮想天文台（e.g. JVO）へのインターフェース部分として発展できればと考えている。

システム概要、プロトタイプの初期報告、生データのパイプラインにおける問題点、などを報告する予定である。